

# 英語授業実践事例映像資料1の大学授業での活用

望 月 正 道

## **Abstract**

The new course of study for senior high schools stipulates that all English classes should be conducted in English. The Ministry of Education and Science has issued a DVD series of English classes conducted in English as a reference for English teachers who might lack confidence. Since university students aiming to be teachers will also need to teach English through English, they should be taught how to teach in English at university. This paper examined the possibility of using the DVD series in order to help university students have a better idea of teaching English at senior high school. Fourteen university students observed three English classes: they first read the textbook lesson, then observed a class section by section, discussed it in a group, and finally got feedback from the teacher. They completed a questionnaire at the end of each class observation and a summative questionnaire after the final observation. The results suggested that observing and discussing the DVD English classes was effective for the students to improve their ideas of teaching English through English if they watched the classes activity by activity, followed by group discussions and feedback from the teacher. They would not have understood what was going on in the classes and what it aimed at if they had seen them without such help.

## はじめに

平成21年告示の高等学校英語学習指導要領は、すべての英語科目で「授業は英語で行うことを基本とする」と明示している。学習指導要領は長年にわたり英語科目の目標のひとつにコミュニケーション能力の育成を掲げているが、それが十分達成されているとは考えられない。楽天リサーチが未成年の子どもを持つ保護者1000人を対象に2012年に行った調査では、「日本の英語教育に満足していない」と回答した割合は86.6%で、不満な点は「実用的な英語力が向上しない授業内容」が最多で68.8%となっている(日本経済新聞2013年6月24日朝刊)。学校英語教育は学習指導要領が目標とするコミュニケーション能力を十分に発達させていないと保護者は考えていることが読み取れる。新学習指導要領が「授業は英語で行うことを基本とする」という文言を入れたのは、このような現実を打破し、目標に掲げるコミュニケーション能力の育成を達成しようとする方針の堅固さを示すためであろう。

しかしながら、授業を英語で行っている教師は残念ながら少数である。文部科学省(以下、文科省)は、平成22年度に3,598校の公立高校を調査対象として教育課程の編成・実施状況調査を行った。英語科目「オーラル・コミュニケーションI」と「英語I」における英語の使用状況は表1のとおりである。

表1 平成22年度公立高等学校の英語科目における英語の使用状況

「オーラル・コミュニケーションI」回答者 9,030名	
発話のほとんどを英語で行っている	1,863人(20.6%)
発話の半分以上を英語で行っている	3,057人(33.9%)
発話の半分未満を英語で行っている	3,613人(40.0%)
発話を英語で行うことはほとんどない	497人(5.5%)
「英語I」回答者 11,400人	
発話のほとんどを英語で行っている	281人(2.5%)
発話の半分以上を英語で行っている	1,492人(13.1%)
発話の半分未満を英語で行っている	7,593人(66.6%)
発話を英語で行うことはほとんどない	2,034人(17.8%)

「オーラル・コミュニケーションI」では、授業を半分以上英語で行う教師は約55%であるが、「英語I」ではその割合は約16%に激減する。逆からみると「英語I」においては発話の半分以上を日本語で行っている教師は84%に及んでいる。このような現状では、新課程において「授業は英語で行うことを基本とする」ことに不安を感じる英語教師は数多いと推定される。

このような教師の不安を払拭するためか、英語で授業を行うための参考資料として、文科省は「英語授業実践事例映像資料1-3」というDVDを制作し、各都道府県の教育委員会を通じて公立高校へ配布している。筆者は「英語授業実践事例映像資料1」（以下、映資1）のみを入手することができた。以下、映資1についてのみに論じる。映資1は、全国10校の高校1年生から3年生までの英語の授業を収録している。「DVDをご覧いただく前に」という前書きに相当する部分では、このDVDで紹介する授業は「理想の授業ではない」が、新課程の授業で取り入れるべき要素を含む授業であると述べている。そして、新課程の授業が考慮すべき点として、1) 4技能の総合的統合的使用、2) 言語活動中心の授業、3) 考える力の育成、4) 自律的学習者の育成、の4つを上げている。学校名、学年、科目名は明らかにされているが、指導教員、指導案、使用教科書・補助教材、撮影年月日などの詳細は公開されていない。また、収録されている授業の多くは50分の授業を短く30分ほどに編集されている。そのような授業では個々の活動はどのようなものであるかは理解できるが、その活動が授業全体で占める位置、目的、費やした時間などはDVDを視聴するだけでは把握できない。このように制作された映資1は、現職英語教員が見れば、英語での授業を作っていくうえで参考になると考えられる。

それでは英語教員を目指して教職課程を履修中の大学生にとってもこのDVDは視聴に値するものであろうか。彼らが英語教師として教壇に立ち英語で授業を行うための準備として、大学の授業の一部として視聴した場合、参考になるものだろうか。彼らはこの映資1を視聴することによって何かを学ぶことができるだろうか。このような疑問についてどのような先行研究がなされているのかをつぎに調べてみる。

## 2. 先行研究

教育職員免許法施行規則は、「教職に関する科目」の最低単位数として中学校教諭一種免許状は31単位、高等学校教諭一種免許状は23単位を定めている。この中で教科教育法の必修単位数は2単位である。教員養成を目的とする教育・学芸大学や教員養成系学部は教職に関する科目が比較的充実していると考えられるが、それでも十分とは言えない。清水・古屋(2008)は、現在大学での英語教員育成が望ましい効果を上げていないことを指摘した上で、英語に関しては英語学・英文学を重視し、英語教育を重んじていない教育職員免許法の問題を指摘している。この法律は1949年に制定されて以来、若干の改訂はあるが、根幹は変わっていない。非教員養成大学・学部は中等教育の教員を数多く輩出しているが、適切に授業ができる力を養成しているかは疑問である。三村(2009)は非教員養成大学・学部における教員養成は学生が十分な授業力を形成できるような課程とはほど遠いと述べている。

英語で授業を行うためには、英語教師を目指す大学生はそれがどのようなものであるかのモデルを知る必要がある。しかしながら、上に挙げた文科省の調査でわかるようにほとんどの大学生は高校時代に日本語で英語の授業を受けてきていて、英語による授業がどのようなものかのイメージを持っていないと考えられる。シャノンとクロフォードは新人教師は自分の指導における学習過程を解釈するにあたり自分自身の学習経験に頼ると報告している(Too, 2013: 161)。どのように教えるかは自分が受けてきた教育に大きく左右されると言える。若林(1983)は、英語教育を改善するためには「教わったようには教えるな」と主張しているが、そのためにはどのような授業が望ましいのかを新人教師や教職を目指す大学生は知る必要がある。大学生が英語での授業を経験してきていない以上、英語で授業ができる教員を養成するためには、大学の英語教員養成課程はそのようなモデルを教える必要がある。

このような状況であるが、教員養成系大学・学部であれば、1年次から付属の小中高等などで実際の授業の観察がカリキュラムに組み込まれていて、英語による英語の授業を見る機会があると考えられる。それに対して、非教員養成大学・学部の英語教員養成課程では、授業そのものを観察する機会が少なく、教育実習に行き初めて授業を観察するという学生もいる。

英語科教育法では、英語教育の目的、学習到達目標、教育学習環境、言語学習、言語学習者、言語教師、指導法、評価についての講義のほかにも、発音、語彙、文法、スキルを実際に教えるマイクロティーチングに多くの時間を費やしている。マイクロティーチングは、教育実習に行く前の学生に教授経験を持たせ指導法を向上させるのに有効とされているが(及川、2013；羽鳥、1996；松本、2005；米山、1984)、モデルとするべき姿を知ってこそその効果を発揮するものであろう。マイクロティーチングで模範とすべき英語の授業を知る機会は、英語科教育法の担当教員が語学教育研究所、英語授業研究会、ELEC 同友会英語教育学会、全国英語教育研究団体連合会などの研究大会の公開授業に参加してレポートを義務づける場合くらいで、十分に英語による授業を観察する機会は少ないと考えられる。

公開授業を参観したあと、授業者と参観者が授業に対して意見を交換する授業研究は、日本で発達し、世界へと広まっている授業改善方法である(秋田・ルイス、2008)。稲垣・佐藤(1996)によると、授業研究は明治時代から学校や地域単位で指導力の向上を目的に行われてきた。公開授業の後には研究協議が続き、授業者と参観者が授業の目的、教材、方法などについて意見を交換し、互いの授業力を向上させようとする。教職を目指す大学生も公開授業を見て、研究協議での意見を聞くことにより、自分の授業観を豊かにできるだろう。

現在では公開授業に加え、授業をビデオに録画して、それを視聴するという授業研究が盛んである。この取り組みは1981年に日本教育方法学会で始まり、さまざまな分野で応用されている(藤原、2009)。新里(1992)は、ビデオの授業を見ての授業分析は授業の現象を分析しているだけであり、このような分析は授業者が基本的な指導技術を身につけているかどうかを知るためには意義があるが、授業を根本的に改善するためには役立たないとしている。根本的な改善のためには、指導案と照らし合わせた授業分析が不可欠であると述べている。高梨(1992)は、1回の授業研究では指導向上にはつながらず、ベテラン教師を中心にした授業研究のサークルによる授業のビデオ撮りとそれを元にしての授業研究を継続する必要があるとしている。横溝(2009)はベテラン教師のメンターとしての役割を重視している。横溝は、先輩教師は、経験の少ない教師の授業を評価し、指導するのではなく、経験の少ない教師と信頼できる人間関係を築き、彼らの問題を聞き、それを自分の問題として

問いかけ、フィードバックすることで、共に成長していこうとするメンターとしての役割が重要であると主張している。

今井(2009)は、大学院の授業で現職教員と教員経験のない大学院生が英語授業名人と呼ばれる教師の市販のDVDの授業を複数回視聴し、討論することで、教室で起こっていることを理解しようと試みている。同じ授業を複数回見ることで、1回目では気づけなかったこともわかるようになり、理解が深まるとしている。松井(2012)は、特定の熟練英語教員の授業を長期間にわたりビデオ撮影し、そのビデオを分析することで、その教師の授業観や授業へのアプローチを解明しようとした。その教師は優れた教師として知られるが、「英語の習得を最優先課題としたのではなく、人と学び合える生徒どうしの関係づくり、自分を見つめなおすことができる生徒の育成など、複数の教育目標をもって授業に取り組んでいた」(p.68)という。

このように先行研究は、現在の大学における英語教員養成制度は、英語で授業をする授業力をつけるには問題があること、優れた英語教師の授業のビデオを視聴することでその授業の理解が深まること、経験の少ない教師の授業力を向上させるためにはメンターとしての先輩教師の役割が重要であることがわかる。文科省制作の映資1を視聴することで、英語による授業についての大学生の理解を深めることが期待できること、そのためには先輩教師の役割が大切であることが示唆される。このような点を踏まえ、英語教員を目指す大学生がモデルにできるような授業のDVDを視聴させ、どのようにしたらそのような活動が作れるのかを議論し、教師がフィードバックするという大学での授業実践を行った。以下にその実践を記す。

### 3. 授業実践

#### 3.1 授業実践の目的

この授業実践の目的は、映資1の視聴が教員を目指す大学生に役立つかどうかを明らかにすることである。その場合、先行研究が示唆することを考慮して、視聴のさせ方や視聴後の議論についての効果も合わせて明らかにする。具体的な課題としては、視聴前の教材研究、授業をグループで視聴すること、授業を区切って視聴し、グループで議論すること、教師のコメント、複数の授業視聴の5点の効果について質問紙による回答で明らかにする。

### 3.2 授業実践の対象者

映資1を視聴した学生は、関東の私立文系大学の非教員養成学部<sup>1</sup>に在籍する英語教員を志望し、英語教育研究というゼミを履修する3年生8名と4年生6名の14名である。彼らの英語力はTOEICスコアで450点から800点と幅広い。日本における英語教育の目的、学校英語教育の目標、教育環境、言語習得、言語学習者、言語教師、指導法などについての英語科教育法I(2単位)を履修済である。教材分析、活動作成、指導案作成、技能別のマイクロティーチングなどについての英語科教育法II(2単位)を4年生は履修済であり、3年生は履修中である。中学校英語教科書を用いてマイクロティーチングを行う英語科教育法III(2単位)を4年生は履修済であるが、3年生は履修していない。したがって、この映像資1視聴の授業実践時において、4年生は15分程度の英語によるマイクロティーチングを経験しているが、3年生は経験していない。

### 3.3 映像資料

映資1には10校の授業が収められているが、視聴しただけでは活動として何がなされているのかわからないものもある。授業で教えられている教科書を読んでおけば、授業や活動の意図が推察しやすくなると考えられる。収録されている授業のうち明示されていないが授業内容から使用教科書が特定できる授業は5つある。そのうち下記に示すように学生がモデルとして模倣してみたいと思うのではないかと考えられる、つぎの3つの授業を視聴することにした。

富山県立富山南高等学校 第1学年 英語I Element English Course I (啓林館) Lesson 9 Seabiscuit

山梨県立吉田高等学校 第1学年 英語I Element English Course I (啓林館) Lesson 5 Could Do Better

愛知県立千種高等学校 第2学年 英語II Crown English Series II (三省堂) Lesson 5 Mars—The Only Way Out?

3つの授業の内容はそれぞれつぎのとおりである。

富山南高校の授業は、20世紀初めのアメリカの競走馬Seabiscuitとそのオーナーと騎手を扱ったものである。以下のような授業の流れで、仮定法過去を使った文を作らせ定着させることを目的していると考えられる。

1. 前時の内容のディクテーション
2. 新教材のオーラル・イントロダクション
3. 音読
4. 教師の問いをペアの生徒Aが繰り返し生徒Bが答える英問英答
5. 文法目標文(仮定法過去)の暗唱練習から作文練習
6. 意見交換 (If I were Prime Minister of Japan, I would....)

教師は、新出単語や重要な文を繰り返しリピートさせ、個々の生徒を指名して言わせ、定着させようとしている。1～5は主に教科書の内容・文を理解させ定着させるための活動である。6は目標とする仮定法過去を用いて、生徒の考えを表現する活動である。

吉田高校の授業は、アルバート・アインシュタイン、ジョン・レノン、ウィンストン・チャーチルのような人は学校ではよい成績を上げられなかったにもかかわらず偉大な業績を残したことを教える単元を扱っている。つぎのような授業の流れで、学校で勉強か自分で勉強かについてディベートできるようにすることを目標としていると推察される。

1. 帯活動：人物当てゲーム
2. 1課分の和訳プリントを見ながらのCDリスニング
3. ペアで音読
4. ディベートの準備
5. 3人1組でディベート (School study side vs Self study side、1人は審判) 役割を替えて3回行う
6. 模範的なグループのディベート

1はウォームアップ、2～3は教科書の理解と表現を定着させる活動、4～6は自分の英語の知識・技能を使って相手とやりとりする練習である。教師は指示を与える、ペアやグループワーク時に助言する、フィードバックする、



というような役割を果たすことがほとんどで、英語を教える、英語について解説するような部分はあまり見られない。英語についての解説は、多数配られるハンドアウトに詳述されていると推測される。教科書の内容を元に、学校で学ぶこと、自分で学ぶことの良さや問題点を生徒が自分で考え、それを言い、さらに相手の意見に対して反論する力を培おうとしていることが見てとれる。

千種高校の授業は、火星と地球の比較に始まり、地球の問題を扱い、人類は火星に植民するべきかどうかを考えさせる単元を扱っている。授業の流れは以下のとおりで、生徒に自分の意見を形成させることを目標にしている。

1. 授業目標の導入
2. 復習：火星の特徴と宇宙飛行士が直面する問題をペアで説明し合う：ペアワークでの英語表現についてのコメント
3. オーラル・イントロダクション
4. グループワーク（火星の植民地化の長所と短所）
5. グループワークの成果を発表
6. 火星の植民地化の長所と短所について2人のALTが意見交換する対話のリスニング
7. 火星の植民地化に賛成か反対かについて留学生在が英語で書いた意見を読む
8. 宿題：火星の植民地化に賛成か反対かについて自分の意見を書く

1～5は教科書の復習・理解・表現の定着のための活動、6～8はそれぞれ教科書の内容に基づき、リスニング、リーディング、ライティングを伸ばす活動になっている。教師は、図やカードを用いて、効果的に黒板を活用している。また、一斉授業だけでなく、ペアワーク、グループワークの前後で活動の指示や活動の成果をペアやグループから引き出し、全体に還元している。火星の植民地化に賛成・反対というテーマに関して教科書を読み、2人のALTの対話の録音を聞かせ、留学生のエッセイを読ませる、という多彩な活動を準備して授業を作っていることがわかる。

この3つの授業は、学生がモデルとして模倣して行うことを考えると、ここで紹介した順序で難易度が上がっているように思われる。そのため、学生に視聴させる順序もこのとおりとした。

### 3.4 視聴手順

DVD 視聴は、平成25年度4月から6月にかけての7週間にわたり「英語教育研究」という専門ゼミの時間で実施した。3つの授業のDVD 視聴は図1に示すような手順を踏んだ。

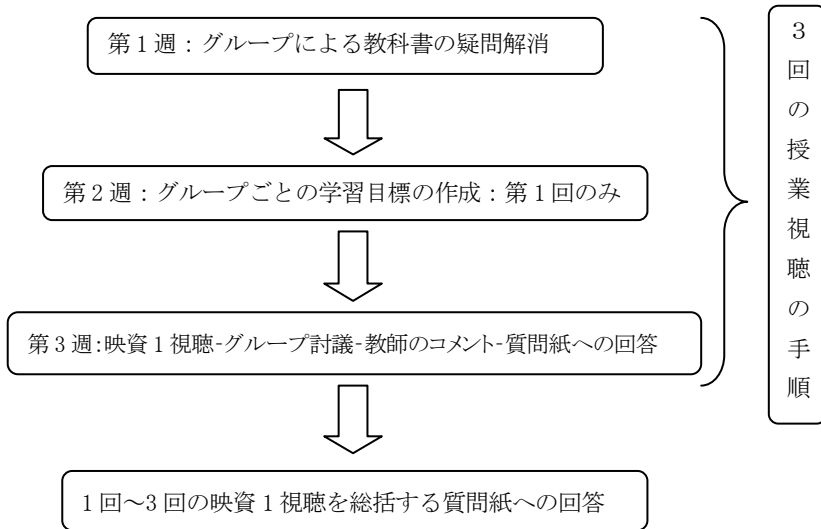


図1 DVD視聴と質問紙回答の流れ

視聴する授業で扱う課の教科書のコピーを前の週に配布し、よく理解できないところなどの疑問点を見つけさせておく。

第1週：教科書の疑問点解消：前週に配布し予習してあった教材の内容について、3人ずつのグループに分かれて、疑問点を話し合う。そのあと、グループで疑問が解消できなかって点について全体で話し合う。

第2週：学習目標の設定：グループごとに、その課を扱う場合の学習目標を設定する。全体で目標を意見交換する。しかし、学生が設定する学習目標とDVDの教師が設定する目標が大きく異なるために、第2回視聴以降、グループによる目標設定は行わなかった。学生は文法事項の説明や練習に多くの時間を割き、それを定着させることを目標にするグループが多かった。しかし、映資1の授業はそのようなことを主たる目標にするものは少ないため、2回目以降は目標設定は行われなかった。

第3週：DVD視聴と討論：活動ごとにDVDを止め、視聴した内容を確認する。その活動の目的をグループで討議する。討議内容は、今見た部分は授業のどの構成要素になるのか、その目的は何なのかの2点である。グループごとに討議内容を発表し、全体で確認する。全体での確認では、学生の意見に対して教師がコメントしたり、教師から学生に質問したりする。

授業の構成要素となる導入、練習、活動の目的が理解できたかどうかと授業で真似したことがあるかどうかについて5件法で聞く質問紙をDVD視聴の前に配布し、記名式で回答させ、授業の最後に回収した(付録1)。

第3回のDVD視聴の後に、3回の視聴を総括する質問紙を配布し、記名式で回答させた。質問紙の内容は、「DVD視聴前の教材研究」、「DVDを一人で視聴した場合」、「授業を区切ってグループで議論したこと」、「学生の質問・意見に対する教師のコメント」、「DVD視聴が自分の授業改善に与える影響」の5項目について3～5件法で回答し、自由記述でコメントを記入する方式である(付録2)。

## 4. 質問紙の回答と考察

### 4.1 毎回のDVD視聴後の質問紙の回答結果

学生14名のうち4年生3名は教育実習のため、すべてのDVDを視聴したわけではない。第1回の視聴は14名全員であるが、2回目は13名、3回目は11名である。3回すべてを視聴した学生数は11名である。各授業視聴後の質問紙への回答結果を表2に示す。

質問項目1の授業の目標が理解できたかどうかについて、富山南高校、吉田高校が平均3を下回るのに対して、千種高校は4.45ときわめて高い。これは、

千種高校の教師が授業の最初に目標を明言していることと、1時間の授業がその目標を達成できるような活動を積み重ねているためであろう。

質問項目2～4の導入・練習・活動の目標が理解できたかどうかについては、いささか問題がある。まず導入・練習・活動の分類が曖昧である。そのためDVDで視聴した部分がどれに当てはまるのかわからないことがあったと考えられる。さらに、このような構成要素そのものがない授業も見られた。たとえば、吉田高校は帯活動の人物当てのウォームアップに続いて、和訳プリントを見ながらのCDリスニングがなされるが、これは導入と呼べるかどうかは議論の余地がある。同様に千種高校の回答では2と3の項目に空欄が目立つ。これはこの授業で、導入や練習に相当する活動を学生が見つけられなかったことを示唆している。

質問項目5の授業の真似をしたいかどうかについて、モデルとして模倣が難しいと思われる千種高校がもっとも高い平均で、ついでつぎに難しいと考えた吉田高校、模倣が容易だろうと思われた富山南高校の順であった。これは現在の自分の力では及ばないが将来はそのような授業をしてみたいという学生の憧憬的願望の表れであるかもしれない。

表2 第1～3回DVD視聴質問紙回答結果

第1回富山南高校		回答者(数字は学年を示す)														
質問項目	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	D	E	F		
1. 授業の目標	3	2		3	4	2	2	3	4	3	2	3	2	4	2.85	
2. 導入の目標	3	2	1	3	4	3	2	3	4	2	3	2	3	4	2.79	
3. 練習の目標	3	2	2	4	4	3	3	3	3	3	2	3	1	3	2.79	
4. 活動の目標	2	2	1	3	3	2	2	2	4	5	1	2	1	2	2.29	
5. 真似したい	3	2	3	2	4	3	3	2	4	2	1	2	1	3	2.5	
第2回吉田高校		回答者(数字は学年を示す)														
質問項目	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	4	平均	
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	D	E			
1. 授業の目標	3	3	2	5	3	4	4	4	2	2	2	2	2	2	2.92	
2. 導入の目標	2	3	1	5	4	2	2	3	3	2	2	3	3		2.69	
3. 練習の目標	3	2	3	5	4	4	3	4	4	3	3	3	3		3.38	
4. 活動の目標	4	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	2		3.69	
5. 真似したい	3	3	4	4	4	3	3	4	3	3	2	3	3		3.23	

第3回千種高校	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	
1. 授業の目標	5	4	2	5	5	4	5	4	5	5	5	4.45
2. 導入の目標		3	4	3			1	4	3		5	3.29
3. 練習の目標			2				1	4			5	3
4. 活動の目標	5		4	4	4	4	4	4	5	4	5	4.3
5. 真似したい	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5	5	4.36

## 4.2 総括質問紙の回答結果

3回のDVD視聴を終えたあとの総括質問紙の回答結果について考察する。回答結果は以下表3～表7に示すとおりである。

### 4.2.1 DVD視聴前の教材研究

表3 1. 教科書を読み、グループで疑問点を話し合ったことについて

回答者(数字は学年を示す)	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	
1. 教科書を読み、グループで疑問点を話し合ったことはよかった	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	4.82

注: 回答の数値を以下のように変換して示している。1→5、2→4、3→2、4→1

1の「DVDの授業を見る前の週に教科書を読み、グループで疑問点を話し合ったことについて」は、11名中9名が「よかった」、2名が「もっと長い方がよかった」と回答している。これらの回答は、映資1の授業を視聴する前に、そこで扱われる教科書を読んでおき、疑問点を解消しておくことが、授業を理解する上で役立ったことを示唆している。これは自由記述のコメントとして「教材を読み込むことにより、映資1をよりよく理解できた」という趣旨のものももっとも多いことから伺われる。教科書の読解について、疑問点の多くはグループ内の話し合いで解決できていたが、グループ内で解決できずに、全体に質問することもあった。たとえば、Seabiscuitの本文にある”Seabisucit crossed the finish line to the greatest cheering racing had ever heard.”という文の構造と意味がわからないと言うグループが多かった。わかると言うグループに説明させてもうまく説明できず、結局は教師が解説した。他に、「1人ではよく理解できなかつたところをグループで話し合うことにより理

解できた」や「自分では気づかなかった授業のポイントも他の人の発言でわかった」という趣旨のコメントもあり、他人と意見交換することで、教科書の内容をより深く理解できることだけでなく、教える立場からどのようなことが指導項目となりえるのかについての理解を広げていることがわかる。グループから疑問がでない場合は、教師が代名詞の照応やイディオム表現などについて学生が理解しているかを確認した。このように90分で高校の教科書1課分をまず理解する、つぎに生徒に質問するとしたらどのようなことを聞くかというような指導ポイントについて考えさせる活動は、DVDの授業を理解する上で役立ったと学生は回答している。

#### 4.2.2 1人でのDVD視聴

表4 2. DVDの授業を1人で見た場合について

回答者(数字は学年を示す)	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	
2.1 何がなされているか理解できた	1	1	1	1	3	5	1	3	1	5	5	2.45
2.2 目標を理解できた	3	5	1	3	3	1	1	3	1	1	1	2.09

注：回答を数値に変換して示している。理解できた→5、理解できない→1、どちらともいえない→3

第2の質問項目「DVDの授業を一人で見た場合について」の回答から2点を考察する。第1点は、「何がなされているのか」理解できたかどうかに関して、11人中6名は「理解できなかった」と回答している。このうち5名は3年生である。英語科教育法ⅡやⅢの履修が進んでいない3年生にとって、英語の授業を1人で視聴しても何が行われているのかを理解するのが難しいのかもしれない。しかも、この場合視聴しているのは活動が短縮されたものであるので、この傾向は強まるのかもしれない。学生はつぎのようにコメントしている。

「1人ではよくわからない点が多いと思うので、先輩を交えた班で見られてわからない点も聞くことができて良かった。」(3A)

「グループで話すことで、授業を見てのまとめについて考えを交換できるため、1人で見ない方が良いと思う。」(3C)

「1人で見たら他の人の意見が聞けないからたぶんわからないと思う。」  
(3D)

学生の多くは、1人で見てもわからなかったが、グループで話し合うことで活動が理解できたと述べている。また、英語科教育法の履修が多い4年生の意見が参考になったと3年生が述べていることも注意に値する。このような授業を視聴させることはマイクロティーチングに役立つと考えていたが、英語科教育法でのマイクロティーチングを経験した後であっても同様に効果があるといえるかもしれない。マイクロティーチングを経験していない学生は、経験済みの学生と同じグループにして、意見交換ができるようにすることが望ましいと考えられる。

2点目は、最初の質問「何がなされているのか」に対して「理解できた」と回答した3名の学生はいずれも第2の質問「活動の目標が何か」に対して「理解できなかった」と回答している点である。これはきわめて興味深い回答である。すなわち、この3名の学生は1人でDVDの授業を視聴して何が行われているのかは理解できると言っているが、その目標は理解していないと述べていることになる。これは授業で行われていることを本当に理解していることになるのだろうか。3名のうち2人はつぎのようにコメントをしている。

「自分に目標を読み取る能力が足りていなかった。」(3F)

「活動の目標はDVDの先生が言っていれば理解できるものの、何もなければそこまで深く考えないと思う。」(4C)

これらの記述から、たとえ何の活動がなされているかを理解したという学生もその活動が何のために行われているのかについては理解できなかったことがわかる。したがって、学生全員が1人でDVDを見た場合、そこで何が何のために行われているのかを理解できていないと言える。グループで話し合うことで、何がなされているのか理解でき、その目標について考えを深めることができたと考えられる。

## 4.2.3 授業を区切ったの視聴とグループ討論

表5 3. DVDの授業を区切りごとに見た内容をグループで話し合ったことについて

回答者(数字は学年を示す)	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	
3.1 何かなされているか理解できた	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
3.2 活動の意図を理解できた	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

注：回答を数値に変換して示している。役立った→5、役立たなかった→1、どちらもいえない→3

第3の質問「DVDの授業の区切りごとに見た内容をグループで話し合ったことについて」に関して2つの質問がなされた。「何かなされているのか」と「活動の意図」を理解するのに役立ったかどうかというものである。結果は、どちらに対しても全員「役立った」と回答している。これには2つの要因が関係している。1つは、授業の構成要素の区切りである。第2の質問「1人でDVDを視聴した場合」については、どこで授業の構成要素が始まり終わるのかが学生にはわからないことを前提としている。「どこで授業の構成要素が終わるのかわからない」ことは、「何をしているのかわからない」ことにつながる。したがって、教師が授業の構成要素ごとにDVDを止めて、区切りを示すことは、「何かなされているのか」を理解しやすくしていると言える。これはつぎのような自由記述欄のコメントによって裏付けされる。

「何をしているのかわからなくなる前に区切って、グループで話し合えたのはよかった。」(3A)

「区切りで意見交換することによって、何をしているのかわからないまま先に進まずよかった。」(3C)

「通して見ると、どこが区切りかわからなかったので良かった。」(3F)

「意見交換することによって自分が見えないところがあることが確認できた。」(4B)

「同じことを見ているのに見る人により異なることがことがわかり理解が深まった。」(4C)



ここで1人の学生が述べているように、区切り、話し合うことでそこまで視聴したことの確認ができ、わからないまま先に進んでしまうことがなくなったことが「活動ごとに区切って視聴させる」ことの一歩良い点と考えられる。

#### 4.2.4 教師のコメント

表6 4. 学生の質問・意見に対する教師のコメントについて

質問項目	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	
4.1 活動の意図を理解するのに役立った	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
4.2 活動の改善を考えるのに役立った	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

注：回答を数値に変換して示している。役立った→5、役立たなかった→1、どちらもいえない→3

第4の質問「学生の質問・意見に対する教師のコメントについて」は全員が、「活動の意図を理解するのに役立った」「活動の改善を考えるのに役立った」と回答している。学生のコメントは以下のようなものである。

「自分が知らないこと、知識の浅いところがたくさんあるので、助言していただいたことは大変役立った。」(3B)

「授業の活動の意図について教師の質問により深く考えさせられ、自分で授業を作っていく上で役立った。」(3E)

「コメントを聞くことで授業を行っている先生の意図の裏側まで知ることが出来た。」(3G)

「授業が小さな段階を積み上げてできていくことがわかった。」(4B)

教師は「DVDで視聴した活動の良い点と悪い点を話し合いなさい」と学生に指示することがあったが、学生はDVDの教師が英語で授業をしていること自体がすごいことと考えていたようで、悪い点があるとは思ってもよらなかったようである。たとえば、CDと同時に音読させる場合、教師は自分も一緒に音読しては、生徒がきちんと発音しているかどうか聞くことはできない。したがって、そのような点は、黙って机間巡視して生徒が正しく発音しているかどうかをチェックするように改めなければならないというような

コメントをした。このような教師のコメントは学生の授業を改善する方法を考える上で役立ったようである。

#### 4.2.5 複数の授業視聴

表7 5. 複数の授業のDVDを見たことについて

質問項目	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	
5.1 自分の授業改善に役立った	4	5	5	5	5	5	5	4	5	4	5	4.73
5.2 他の教師の授業分析に役立った	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	4.82

注：回答を数値に変換して示している。大いに役立った→5、役立った→4、どちらともいえない→3、それほど役立たない→2、役立たない→1

第5の質問「複数の授業のDVDを見たことについて」は、8名が「自分が授業をしていく上で大いに役立った」、3名が「役立った」、9名が「他の教師の授業を分析する上で大いに役立った」、2名が「役立った」と回答している。どのように役立ったのかについては、自由記述につぎのようなコメントが見られる。

「いくつかのDVDを見ることで様々な授業のやり方を知れてよかった。」

(3A)

「自分が授業をするときに、どのような流れですればよいかを知ることができた。」(3C)

「様々な授業方法があることを学べたし、その授業で何を目標としてやっているかで授業方法が違うことがわかったから。」(3D)

「授業のDVDを見ることは初めてだったのでとても役立った。」(3E)

「複数みることによって、メリット・デメリットがわかり、今後に生かせる。」(3F)

「異なった活動を見ることで自分の中でもアイデアが浮かびとても役立った。」(3G)

「学校でやるのは全くイメージがわからないので、少しはイメトレができたし、その中でも良いものとそうでないものいろいろ見られた。」(3H)

「いくつか自分が授業をするときに使ってみたいことがあったので、プロの先生の授業を見ることはとても役立った。」(4A)

「1つの教材でも授業は多様なため、様々なものを見ると授業分析の目を養える。」(4B)

「『授業中の先生』をよく観察して、良いところ、悪いところを発見できた。」(4C)

このような記述から学生は英語でなされる授業を見た経験が少なく、3つの授業を視聴したことで、さまざまな活動や授業方法があることを学び、それを自分なりに評価し、自分でもやってみたいと考えていることがわかる。また、授業を見ることで自分も授業のアイデアが浮かんだと1人の学生が書いているように、自分の授業を作っていく上でアイデアを刺激したとも考えられる。

## 5. 結論

この授業実践をまとめると、まず授業で使用する教材をあらかじめ読み込みみどのような内容かを理解させておくことが、映資1の授業の活動やその意図を理解する上で有効ということである。その場合、グループで疑問点を話し合わせれば、互いに教え合い、疑問の解決につながるが多かった。しかし、それでもわからない点は、教師が教える必要がある。第2に、教職課程を履修中の大学生は映資1を1人で見てもそれから十分に学ぶことは難しいといえる。大多数の学生は映資1を1人で見ただけでは、行われた活動が何だったのか、その意図は何だったのかを理解できなかったと述べている。グループで活動が何だったのか、その目標は何かについて話し合うことによって、理解を深めることができる。第3に、授業を最初から最後まで通して視聴するのではなく、活動ごとに区切って、何が行われたのか、その意図は何かを確認していくことが効果的と考えられる。回答にあるように、自分ではどこが活動の切れ目かわからない、何が行われたのか、その目的が何かわからないまま授業を見続けても、授業がどう組み立てられていったのかわからない、という理由のためである。第4に、教師のコメントは、学生だけではわからない点を指摘し、授業力を向上させるために不可欠である。こ

これは、授業研究グループはベテラン教員を中心とすべきであるという高梨(1992)や先輩教師が新人教師に対してメンターの役割を果たすべきであるという横溝(2009)の主張を支持するものである。第5に、学生は授業を見学する経験が少ないので、DVDであっても複数の授業を視聴することは、学生が授業を改善していく方法を考える上で役立つと考えられる。以上から、文科省制作の英語授業実践事例映像資料1は、しかるべき手順に則って利用すれば教員養成課程の大学生にも大いに役立つものであるといえる。知識や技能が不十分な大学生が、経験豊かな教師の授業を見ることで、何が身についたと感じたのか、実際に自分が授業をするときにそれを応用できるかなどについて、今後リサーチクエストを立てて調査することは意義ある研究となるのではないかと考えられる。

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり青山学院大学の高木亜希子准教授から草稿段階で貴重なコメントをいただきましたことに心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- 秋田喜代美・キャサリン・ルイス (2008). 『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』 東京：明石書店.
- 稲垣忠彦・佐藤学 (1996). 『子どもと教育 授業研究入門』 東京：岩波書店.
- 今井裕之 (2009). 「授業を理解することへの2つの接近—授業者として観察者として—」 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介 (編) 『リフレクティブな英語教育をめざして 教師の語りが開く授業研究』 (pp.233-264) 東京：ひつじ書房.
- 及川賢 (2013). 「ビデオを用いたフィードバック—大人数にオーラルイントロダクションを実践させる工夫」 『英語教育』 第62巻第4号, 10-11.
- 清水公男・古家貴雄 (2008). 「日本の英語教員養成の課題についての基礎的研究：大学での養成の課題と現場での教育実習の問題点を中心として」 『山梨大学教育人間科学部紀要』 第10巻, 129-137.
- 高梨庸雄 (1992). 「「良い授業」「悪い授業の差」 『英語教育』 第41巻第2号,

11-13.

- 新里眞男 (1992). 「授業分析をどう行うか」『英語教育』第41巻第2号, 8-10.
- 羽鳥博愛 (1996). 「ビデオの視聴と模擬授業を中心とした英語科教育法の提案」『教育実習研究指導センター研究紀要』第20巻, 1-10.
- 藤原幸男 (2009). 「授業研究運動の展開」日本教育方法学会編『LESSON STUDY IN JAPAN 日本の授業研究上巻 授業研究の歴史と教師教育』(pp.25-38) 東京: 学文社.
- 松井かおり (2012). 『中学校英語授業における学習とコミュニケーション構造の相互背に関する質的研究 ある熟練教師の実践過程から』東京: 成文堂.
- 松本青也 (2005). 「英語授業評価の観点」『愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会言語文化』第13号, 16-24.
- 三村和則 (2009). 「免許選択制の立場から—非教員養成大学・学部での授業研究の現状とあり方—」日本教育方法学会編『LESSON STUDY IN JAPAN 日本の授業研究上巻 授業研究の歴史と教師教育』(pp.125-134) 東京: 学文社.
- 横溝紳一郎 (2009). 「教師が共に成長する時—協働的課題研究型アクション・リサーチのすすめ—」吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介(編)『リフレクティブな英語教育をめざして 教師の語りが開く授業研究』(pp.75-118) 東京: ひつじ書房.
- 米山朝二 (1984). 「マイクロティーチングを適用した英語教育養成」『日本教科教育学会誌』第9巻, 37-50.
- 若林俊輔 (1983). 『これからの英語教師 英語授業学的アプローチによる30章』東京: 大修館書店.
- Too, W. K. (2013). Facilitating the development of pre-service teachers as reflective learners: a Malaysian experience. *The Language Learning Journal*, 41, 161-174.

## 付録1：質問紙：DVD 英語授業視聴

視聴日時 \_\_\_\_\_

英語授業高校名 \_\_\_\_\_

学年 \_\_\_\_\_

授業科目 \_\_\_\_\_

1. 授業の目標が理解できましたか	5・4・3・2・1
2. 導入の目標が理解できましたか	5・4・3・2・1
3. 練習の目標が理解できましたか	5・4・3・2・1
4. 活動の目標が理解できましたか	5・4・3・2・1
5. この授業を真似したいですか	5・4・3・2・1
6. 5で3以上をつけた人のみ回答してください。真似したい点は何ですか。	
7. この授業を行うためには、授業者に質問したいことは何ですか。	

## 付録2：総括質問紙：DVD 英語授業視聴アンケート

1. DVD の授業を見る前の週に教科書を読み、グループで疑問点を話し合ったことについて
- (1) よかった (2) もっと長い方がよかった (3) もっと短くてよかった  
(4) なくてもよい

コメント \_\_\_\_\_

2. DVD の授業を一人で見た場合について
- (1) 何がなされているのか  
理解できた・理解できなかった・どちらともいえない
- (2) 活動の目標が何か  
理解できた・理解できなかった・どちらともいえない

コメント \_\_\_\_\_

3. DVDの授業の区切りごとに見た内容をグループで話し合ったことについて

(1) 何がなされているのか理解するのに

役立った・役立たなかった・どちらともいえない

(2) 活動の意図を理解するのに

役立った・役立たなかった・どちらともいえない

コメント

---

4. 学生の質問・意見に対する教師のコメントについて

(1) 活動の意図を理解するのに

役立った・役立たなかった・どちらともいえない

(2) 活動を改善する方法について考えるのに

役立った・役立たなかった・どちらともいえない

コメント

---

5. 複数の授業のDVDを見たことについて

(1) 自分が授業をしていく上で

大いに役立った・役立った・それほど役立たない・役立たない・  
どちらともいえない

(2) 他の教師の授業を分析する上で

大いに役立った・役立った・それほど役立たない・役立たない・  
どちらともいえない

コメント

---

氏名

---